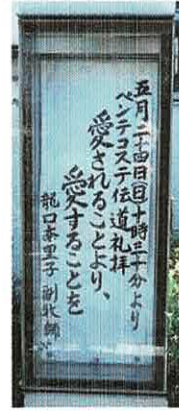


春の伝道礼拝第2回 (5月24日)

愛されることより、

愛すること

龍口 奈里子



レビ記

19章18節

ルカによる福音書 10章25〜29節

キリスト教というと「愛」という言葉を思い浮かべる人は多いと思います。とくにその中でも「隣人愛」というキーワードは、聖書を手に取ったことがない人にも良く知られています。たぶん「隣人愛」に生きた人

たちを知っているからだと思います。マザー・テレサ、アッシジのフランチェスコ、ダミアン神父、キング牧師、中村哲医師。彼ら、彼女らは隣人愛をまさに実践したキリスト者たちです。ただ実践しただけではなく、聖書に裏打ちされた言葉も残っていて、その言葉からも、私たちは「隣人愛」について、なんと素晴らしい教えかと思えます。でも、自分自身に置き

換えるとそんな風にはなかなかないとも思うわけです。

例えば、マザー・テレサは「大きなことはできません。ただ、小さなことを大きな愛をもって行うだけです」という言葉を残しました。アッシジのフランチェスコの「平和の祈り」は今でもよく祈られています。ウクライナやガザの紛争が深まる中で「憎しみのあるところに愛を」という祈りの言葉が、クリスチャンでない人々の心にも響く祈りとして続けられています。フランチェスコ自身のものであるのかは定かではありませんが、この詩から彼の生き方、信仰が伝わってきます。

「聖人伝」によると、フランチェスコは13世紀に、イタリアのアッシジで裕福な商人の家に生まれました。何不自由なく奔放な生活を送って騎士になる夢に燃えていた青年時代でした。しかし神聖ローマ帝国のドイツ勢力とローマ教皇の勢力側とのはざまにあったイタリアでは内乱がおこります。戦闘に参加した彼は敗北し、一年以上牢獄で捕虜となりました。病気になる、何もかも人生が

思い通りにはいかなかったのでした。ある意味、フランチェスコの青年時代は奮と争いの時代でもありました。最初は彼も栄光の道を目指して戦争に参加するのですが、捕虜となり病を負い、苦しい日々の中で回心するのでした。

「私の教会を立て直しなさい」と神の声を聞くのです。この言葉に促されて、いくつもの教会を建てた彼が見たのは、町の外の世界でした。貧困にあえぎ、病を負い、苦しんでいる人々がいました。彼は父親の商いの商品の毛織物をすべて売り払いま

す。父親からは勘当され、町の人々からはおかしくなつたと嘲笑され、行き場を失った彼が向かったのは、町の外にあるハンセン病、ライの人たちの集まる巣窟さうくつでした。最後はフランチェスコ自身も同じ病を患い、みじめに死んでいくのです。彼が回心したのは、牢屋の中の生活が苦しかったから、自分の苦しみから救われたかったからではありません。町の外の世界をみたとき、もう一度「私は誰の隣人になるか」という問いを自分自身に問い直したからこそ、自分の心を神のみ心に引き直

すことができたのです。

今日のルカによる福音書10章の「善いサマリア人」のたとえの箇所はまさに、主イエスが「隣人愛」について語っている場面です。主は「サマリア人のたとえ」から、神の愛をもって隣人を愛するとはどういうことなのかを具体的に伝えています。

冒頭で、ある律法の専門家が主イエスに「先生、天国に行くにはどうしたらいいですか」と聞くと、主はこう問われます。「律法にはなんと書いてあるか」。律法の専門家である彼は「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」「また『隣人を自分のように愛しなさい』とあります」と得意になつて答えるのでした。これはレビ記19章18節、申命記6章5節からの引用です。すると主は「その答えは正しい。それを実行しなさい」と言われます。そこで彼はもう一度尋ねます。「それでは、私の隣人とはだれですか」と。

そこで主イエスが「善いサマリア人のたとえ」を話し始めるのでした。たとえ話の後半部分である30節以下

はルカだけの記事です。並行記事のマルコによる福音書12章28節以下には前半の二人の問答しか記されておらず、後半のたとえばルカだけが伝えています。このルカのたとえばがあるからこそ、「私の隣人とはだれですか」という律法の専門家が問うた問いの答えがはつきりしてくるのです。

た、ただそれだけで、彼は、いつも
軽蔑され、差別され、敵対されている、
このユダヤ人を助けたいと思つたと
いふのです。

このたとえの結びの部分にとくに注目したいのですが、主は最後に律法の専門家に、「倒れたユダヤ人をみて通り過ぎて行つた祭司、レビ人、サマリア人、この三人の中でだが、追いはぎに襲われた人の隣人になつたと思ふか」と尋ねます。すると彼は「その人を助けた人です」と言います。ユダヤ人の彼にとつて、あくまでも「それはサマリア人です」とは言いたくなかつたのでしよう。すると主は「行つて、あなたも同じようにしなさい」と言われたのでした。このたとえから、何か気づかれたでしょうか。

たか「つまり「隣人となる」こと、起こるだろうかと考えた。……この
その行為こそが、自分を愛するよう 違いが彼を分けたのだ」と。自分の
に隣人を愛するということです。ために「立ち止まらなかつた」レビ
と主は教えておられるのです。人や祭司たち、「自分がいま立ち止ま

自分と同じ民族、同胞、同じ国やらなければ、この人に何が起きるか」と考へ、立ち止まつたサマリア人町、同じ考へを持つならば助けることができる。しかし、自分とは異なる考へを持つ人、自分を傷つけた人、富の差がある人であるならば、その人が困つていても、できるだけ通り過ぎようとする。そのようなことが、ということなのです。

で線を引いて、いつも「誰が自分の隣人であるか」「この人は隣人だ」「この人は隣人ではない」と思いながら生きて行つても、それは自分を愛するように隣人を愛することにはならない、と主は言われるのです。この違いは大きいのです。

（出席30名。文責・編集委員会。要約）

教で、このサマリア人のたとえの箇
所について語っています。

「レビ人や祭司は、自分がこの人を助けるために立ち止まつたなら、いつたい自分の身に何が起るだらうかと考えた。しかしサマリア人は、もしこの人を助けるために自分がいま立ち止まらなければ、この人に何が

